

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子
『気鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画』

20世紀歌人群像

9

釈 迢空

米川千嘉子

間もなく21世紀。
近代短歌から現代短歌へ…
短歌はこの100年でどのような足跡を残してきたのだろうか。
24人の歌人にスポットをあてて20世紀の短歌を検証する。



第一章

人と時代

釈迢空（折口信夫）は明治二十年大阪府西成郡木津村（現大阪市長津区敷津西）で両親の五男として出生。生業雑貨を扱う商家だったが、婿養子の父は医を本業として家業を兼ねた。やはり養子である祖父は奈良県明日香村飛鳥坐神社の神主飛鳥氏の出で、迢空は終生その血筋を強く意識していた。曾祖母、祖母、二人の伯母ら、女性の多い大家族には、父母の不仲とそれに関わる深刻な葛藤があり、複雑な生育環境が迢空の孤独感や女性観に影響を与えた。

大阪府立第五中学時代から『言海』『万葉集略解』『令義解』などを精読。非凡な才能を示したが、迢空の志したのは国文学というより国学であった。また、全盛期の浪漫主義文学、詩歌に親しみ、雑誌に投稿した。三十五年、父急死。三十七年、卒業試験に落第。古代に思いを馳せる大和への旅多く、また同級生辰馬桂二への思慕はその後長く迢空のうちにあって、『死者の書』（昭和十八年刊）に結実したといわれる。三度にわたる自殺未遂もあり、旅と古代、愛と死という迢空終生の主題はすでにこの中学時代に形成された。

三十八年、中学卒業後、国学院大学予科入学。宗派神道教義研究団体神風会に加わって活動。本科国文科に進んだ四十年には落合直文門下の服部躬治を訪ねて入門するが、二回の来訪に終わる。四十二年、二十三歳で初めて東京根岸短歌会に出席。「アララギ」に作品が掲載される。四十三年、大学卒業。卒論は「言語情調論」。この頃から釈迢空の号を用いた。四十四年、大阪府立今宮中学教員となる。教え子との交流は濃密で、彼らを伴った旅もした。中学時代からの



飛鳥坐神社 (奈良・明日香村)

頻繁な旅は、しばしば長きにわたる困難なものだったが、この旅が逸空の民俗学と短歌に不可分に結びついている。

大正二年、雑誌『郷土研究』への投稿が目ざされて、柳田国男の知遇を得、民俗学研究の方向を明確にしていた。短歌表記に句読点を用い始める。大正三年、二十八歳の時中学を辞して上京。慕う教へ子

十人ほども上京、共同生活するなどのこともあって、数年間生活は窮迫、不安定であった。四年頃から「アララギ」での論文、作品掲載多くなり、六年、同人。選歌その他で活躍したが、十年末選者を辞し「アララギ」を去る。八年、国学院大学臨時代理講師。民俗学雑誌「土俗と伝説」を発行。民俗学とその導入による国文学研究という独自の道を開拓し、沖繩ほか各地の民間伝承採訪も精力的に行う。十一年、国学院大学教授（昭和三年、慶応大学教授）。十三年、古泉千樫に誘われ、北原白秋、前田夕暮らとの超結社雑誌「日光」創刊に参加。十四年、国学院大学予科生を中心とする短歌結社「鳥船社」結成。第一歌集『海やまのあひだ』刊行。十五年、「改造」に「歌の円寂する時」を発表。発生の歴史から抒情詩であることを運命づけられた短歌は減びかけているという短歌滅亡論であった。昭和五年、第二歌集『春のことぶれ』刊行。『古代研究』（昭和四五年）など、学者として、歌人としての位置を重くしていった。

戦時色が強まる中、十七年、全編戦争詠である『天地に宣る』刊。十九年、十五年間同居し愛情をそそいだ藤井春洋が硫黄島に出征すると、逸空は養嗣子として入籍。戦死した春洋を「愚痴蒙味の民として我を哭かしめよ。あまりに惨く死にしわが子ぞ」と慟哭した。戦後、詩集『古代感愛集』、『近代悲傷集』、釈逸空短歌綜集三『水の上』、同四『速やまひこ』などを出版。二十六年、「短歌研究」に「女人の歌を閉塞したもの」を発表。二十八年、胃癌のため六十七歳で死去。死後、『倭をぐな』（内容的に『倭をぐな』と『倭をぐな以後』に分かれる）、詩集『現代襤褸集』などが刊行された。

第二章

歌と時代

逸空はともすれば、その特異性ばかりが強調されやすい歌人である。確かに、短歌を日本人につきまとっている「怨霊」のようなものとい、古代の日本人の心に共鳴し理解するための様式ともしたその短歌観は、さまざまな意味で自我の追究と表現をその第一目的とする近代的な短歌観と異なるものであった。しかしそれは古典主義などではない。浪漫主義短歌、写実主義、反アララギ的な「日光」という集団、あるいはプロレタリア短歌や生活短歌的なものなど、逸空は明治から大正昭和へ、同時代のさまざまな潮流に身を置き影響を受け、または興味をもって接近した試みをしている。逸空の短歌観と学識、古代日本人の精神や和歌の抒情詩としての本質認識と和歌史への広大な視野は、同時代の作品作家を偏見なく、細やかで深い理解と客観的で鋭い批評をもって見通すことを可能にし、なお独自の世界を生み出し貫いたといふべきだろう。

初期には、写実主義の信奉というより「今の強力な渦巻きに乗つ

てゐることが、一等成長する道」と意識して「アララギ」に身を置き、歌の様式の固定、それに繋がる滅亡を見据えながら、自己に内在する拍子を示すための表記や叙事詩としての可能性を探る多行書きを試みた。逍空は、本質的でありながらつねに現実的、具体的にである。最後の歌人となる覚悟でつくられた作品は、執着力のつよい内燃の文体に、深く孤独な魂の悲調を刻印する。

具体的に歌を鑑賞してみよう。

人も 馬も 道ゆきつかれ死に、けり。旅寝かきなるほどの
かそけさ
『海やまのあひだ』

駿河・三河地方の旅をうたう「供養塔」五首から。苦しい山間の旅路で倒れた無名の人々の塚、馬を祀った馬頭観音の石塔婆に出会いつつ、黙々と作者は峠を越えてゆく。山河の静けさとともに作者に染みいつてくるのは、生きてひたすら歩み、死んでいった馬や人の無名の魂が溶けている「かそけさ」。古代の時間から一続きの空間に、生そのもののさびしさが溶けている気配が「かそけさ」であり、生と世界の様相そのものとしての「かそけさ」がもつともよくあらわれるのが、旅なのであった。「かそけさ」に作者も溶けている。その時、作者は生者なのか、死者なのか。近代的な自我意識によって生まれたのとは別の、もう一つの生の寂寥である。

餌に満りて、
ゆるぎあるける 犬のよさ。
大白犬に

生れざりけり

『春のことぶれ』

「昭和職人歌」の「失業人」の一首。失業してひもじさに堪えている男になってうたう。偶然人と生まれて貧しく、犬と生まれて腹足りるものの交差。ある時代相、社会相をうたっているながら、「大白犬に 生れざりけり」はゆつたりした詠嘆の中に、そうした相対的なものを通りこした複雑な諦観のニュアンスを滲ませる。

よき人に、口吃り言ふ 我や。

世の階級を無視す
と 揚言げて来し

『春のことぶれ』

「昭和職人歌」の中の「怠業工人」十四首は、貧しい工業労働者が若い資本家との団交に臨む様子をうたった多行書きの連作である。「客間の氈／柔に乗りゐる 我が足の／この幅にすら／当る銭なき」「よろしきは、／朝のたばこの 葉まきの香。／つくぐに、／われを さもし と思ふ」「白く肥えて／大き手を／さし出したり。／握手求むる／みづぐしき手」など。一首とりだして特別な秀歌とはいえないが、プロレタリア短歌の階級意識とスローガンの単純さを免れ、資本家のもとに乗り込んだ一人の労働者のまことに人間的な表情、涙ぐましい本音、つましき、意気と卑小さを見据える。突放していない。他にも、隣家の夫婦や、妻を捨てた弟子をうたった連作など、執着深い人間への興味と観察、根底の所で悲しみとしての人間愛が『春のことぶれ』に満ちているのに注目する。

兵隊は 若く苦しむ。草原の草より出で、
「さ、げつ、」
せり
『天地に宣る』「倭をぐな』



著作物の一部

「苦しみ」にじかにふれる生々しい驚きと悲しみがある。中国詠にはこの他、「車站の外は たゞちに土の原。煙の如く 人わかれ行く」^{（コソシキ）}「乞食の充ち来る町を歩き行き、乞食の屁の音を 聞くはや」など、強烈な存在感をもつ秀作が多い。戦争に苦しむ人間と時代を感じつつ、同時にそうした時代状況をさえ無にしてゆく大陸の風土気質に反応し、それがどこか人間の世界そのものを象徴しているのだ。

ひのものとの大倭の民も、孤独にて老い漂零へむ時 いたる
らし
「倭をぐな」

昭和二十一年作。「八月十五日の後、直に山に入り、四句下らず。心の向ふ所を定めむとなり」の詞書がある。戦いに敗れた日本人、すなわち「ひのものとの大倭の民」の運命を見つめた歌だが、敗戦が日本の神の敗れであり、愛子・春洋の喪失であったところに、他の

『天地に宣る』には、「神怒り かくひたぶるにおはずなり。今し 断じて伐たざるべからず」といった多くの戦意高揚歌の一方に、こういう歌がある。昭和十六年、中国旅行での歌。破壊された町を行く途中、ふと

草の中から現われた若い兵隊に会う。戦争に赴く若者への思いは強かった逋空だが、二句切れの緊迫にその

同時代の歌人のうたいえなかつた逋空の骨にひびく沈痛さがある。そうした沈痛な思いが「遠つ世の恋のあはれを 伝へ来し我が学問も、終り近づく」^{（倭をぐな）}という思いにつながり、老いの意識につながったが、しかしなお、逋空はそれに抗うように新しい時代の蘇り、若者への希望を失わなかつた。

幾百の咳病の中に見る 老いさらばへる 古き恋人

「倭をぐな 以後」

六十二歳、神経痛を病み、老いを意識することが増えた歌人の中におこったイメージ。若き日に逋空のもとを去った恋人が今は咳を病む老人たちの一群に居る。逋空の恋は、報いられ謳歌されるというのではなく、ひたぶるな執着にその個性を見せた。ここでなお、逋空は、背かれても死ぬことのなかつたいくつかの自身の愛執を見つめている。「何ごともなかりしごとく 朝さめて洩瓶の水を かつがへしたり」^{（倭をぐな 以後）}など、老いを意識した逋空の歌には、慟哭と虚無、自他への愛執と残酷が入り交じる。静かな韻律の中に、無限の寂寥に通じる凄まじさがあつて、衰弱や枯淡といった一般的な老いの歌とはかなり異なるのだ。

人間を深く愛する神ありて もしもの言はゞ、われの如
けむ
「倭をぐな 以後」

逋空の死後、手帳に書かれていた遺作。どんな神か、いろいろに考えられるが、具体的であるより、より抽象的な、逋空にとつての神のイメージではないか。神とは、執着深く見つめ愛する者である。「もしもの言はゞ」には、神の言葉を伝える者としての古代的な我

のイメージがあるが、想像の声の中の神は、どこまでも悲痛である。その悲痛さは、戦争を通過し、敗れ、決定的に愛するものを失うことを知った神のもの。その神の顔はどこか「水底に、うつそみの面わ 沈透き見ゆ。来む世も、私の 寂しくあらむ」（『海やまのあひだ』）という顔に似ていないか。他者を愛する者が本質として持つ悲しみの顔である。

第三章

短歌史におけるポジション

大正十五年、「歌の円寂する時」において逄空は、「歌はこの上伸びやうがない」「歌は既に滅びかけて居る」と断言、三つの理由をあげた。歌の享けた命数に限りがあること。歌よみが人間の出来て居な過ぎること。真の批評が出て来ないこと、である。ことに重要な第一の理由について、その発生の歴史から抒情詩であることを宿命づけられた短歌の本質が新しい時代の生活をとりいれがたく、その発展を困難にしている。「宿命的に纏綿としてゐる抒情の匂ひ」のために叙事詩となれない、と述べて、叙事詩としての短歌の可能性をさぐる。それが「春のことぶれ」での多行歌の試みであった。そして、「海やまのあひだ」以来の句読点を入れた表記法もまた「歌の様式の固定を、自由な推移に導く予期から」出たもので、すでに滅亡論に繋がる視点がある。明治四十三年の尾上柴舟の「短歌滅亡私論」から戦後の第二芸術論まで、短歌滅亡論は少なくないが、短歌発生の歴史、抒情詩としての本質に遡って語られ、持続的に自身の滅亡論に挑む短歌革新の試みを伴ったものは他にない。

もう一つの重要な歌論「女流の歌を閉塞したもの」で逄空は、「アララギの第一のしくじりは女の歌を殺して了った」ことだと断言。

「写実主義以後栄えた現実主義」が、女性がその本領としてきたセンチメンタルでロマンチックな気分感覚の優先した歌、「ぼうずのある歌」、「自由に語を流して、魂を捉へる」歌の伝統を放逐したとい、鷗外美学が新詩社を壊滅させたとも断じた。女の歌を初めて表現論、文体の問題として取り上げた画期的な論は、本質的には王朝以来の艶の伝統をもつ女歌がアララギ的写実主義の男歌によって断たれることを危ぶむものだった。その女歌論は、滅亡論同様、すでに大正期から逄空が持続的に発表しているもので、それはまさに、「細々しく瘦せて、少ししやがれた小女のこゑを聞くやうだ」と逄空の歌を批判した斎藤茂吉の写実主義に対して、王朝以来恋を中心にしたうたわわれてきた執念く衝迫力をもつて内燃する表現、他ならぬ逄空自身の短歌を主張するものであった。本質的であり歴史的であり、実作者としての覚悟と痛みに裏打ちされた「歌の円熟する時」「女流の歌を閉塞したもの」は、今日でも私たちの表現意識に具体的に問いかけて働きかける希有の滅亡論であり、女歌論なのである。

逄空の表記法、句読点使用、一字あけや多行書きは、広く一般化したとはいえず、逄空に匹敵する必然性をその作品に湛える継承者はまだ生まれていない。しかし、幾人かの意識的な作者によって現在も時々試みられており、まだその可能性についての結論はでていないというべきだろう。そしてそうした状況を覆うように、逄空その人の生涯の悲調そのものであるような生々しい短歌の息づかい、歌というものの存在を今に重く問いかける。

（よねかわ・ちかこ 「かりん」編集委員）

※次号は土屋文明（加藤治郎筆）です。